

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して（二七三）

文・出水 康生

戦国おもしろ百話

三好・織田・豊臣・徳川時代に生きる横田内膳正村詮

阿波岩倉・和泉岸和田・近江水口・駿河駿府・伯耆米子への変転（五）

横田内膳のこと

横田内膳正村詮（一五五三～一六〇三）が阿波岩倉城主三好康長の甥に生まれ、成長と共に康長に従って活動し、二〇歳の時に堺の妙国寺の日珧上人に帰依して熱心な法華宗徒となる。前半生を阿波岩倉城で生きる。阿波・讃岐・淡路（ASAトライアングル）を本拠として、三好長慶が京畿・堺を支配する戦国天下人として「環大阪湾政権」を形成した三好時代に成人する。京畿・堺で織田信長が三好長慶に代り、阿波国内では三好時代

の平穏が土佐の長宗我部勢の侵攻によって内乱して三好氏が衰亡する。その動乱の中で、阿波岩倉から堺・岸和田に出て、信長の輩下として台頭した中村一氏が本能寺の変後の秀吉による山崎合戦・賤ヶ岳合戦の功績によって岸和田城主となった時に家臣とされて重用される。その後は中村一氏が近江水口城主となると近江水口に移る。秀吉の北條氏攻め関東平定の後には徳川家康の本拠であった駿河駿府城に中村一氏が城主として移ると、その下で検地など治政に活躍する。関ヶ原合戦の直前に中

村一氏が病死するが、嫡男の一忠が伯耆米子城（一八万石）に移封されると横田内膳正村詮は徳川家康の下命による筆頭家老として城下町形成に敏腕を揮う。しかし、慶長八（一六〇三）年十一月に「上意討ち」で誅殺され、一族が抗戦しての米子城騒動・横田騒動と記録される大事件となった。

このように、三好氏の京畿・堺支配の時代に阿波岩倉から河内高屋城、堺に往来して素養を磨き、長宗我部氏の侵攻によって阿波三好氏の滅亡の時に苦勞する。その後に織田信長から豊臣秀吉の下で中村一氏の家老として和泉岸和田・近江水口・駿河駿府に移住して治政に功績を上げ、徳川家康の下で伯耆米子に移り、米子城築城・城下町の形成にその功が現在に伝えられるが、その最後は「上意討ち」の誅殺であり、さらにはそれを不服とした一族が抗戦して、森鷗外の『阿部一族』のような壮烈な一族滅亡。そして慶長一四（一六〇九）年に中村一忠の病死、継嗣不在により中村氏の改易・断絶となる横田内膳正村詮の生涯五〇年が十六世紀後半から十七世紀初頭の戦国乱世から「天下統一」の時代で、その時期に波乱万丈の生涯を生きて死ぬ。その菩提が米子の妙興寺でされる。

一氏と村詮の出会い

中村一氏が秀吉によって岸和



横田内膳正村詮の肖像軸
（米子妙興寺蔵・中村郁夫撮影）



横田内膳正村詮の
「了性院殿法顔宗栖大居士」の位牌



久米田寺から生駒山を臨む

田城主（三万石）に封ぜられたのは天正十二（一五八四）年のことである。信長が本能寺の変で焼滅する天正十年の前年から織田勢の威勢を背景にして三好康長（信長の三男信孝を養嗣とする）が長宗我部元親の支配下に置かれる三好氏の本拠である阿波国内の失地の回復を伺い、阿波西部では阿波岩倉城まで、阿波南部では一宮城から牛岐城までを失地回復した。この当時には、以前に信長が元親の嫡子に信親を名乗らせ、「四国は切り取り次第」と承認していた盟約を破棄し、四国国分けの新しい決定として「阿波国主に三好康長、讃岐国主に三好（織田）信孝」とすることにして、長宗我部勢の討伐軍が信孝を大将、丹羽長秀を参謀として岸和田に集結して六月三日に阿波への渡海の前日に本能寺の変が発生したのである。それで、三好康長による阿波での失地回復、信孝軍による阿波渡海も雲散霧消する。それを好機として長宗我部元親が土佐勢の全力を集結して八月二八日の中富川合戦で三好（十河）存保勢を撃破して、九月二十一日に勝瑞城を開城して存保が東讃岐の虎丸城に退去し、阿波が長宗我部氏に支配される。この動乱の時に、横田村詮は阿波岩倉城から三好康長と共に畿内に出て、中村一氏との出会い

となり、その妹を妻として重臣としての生活を始めた。

岸和田の地政的位置

堺は摂津と和泉の両国にまたがって存在する。北庄は摂津、南庄が和泉で大小路が国境となる。そやさかいにサカイと言うんやだえ、とされる。和泉支配の中心が岸和田でそこに岸和田城が築城されたのは三好長慶が領域を和泉に拡大した時で遅くとも弘治三（一五五七）年までには築城され、そこに末弟の十河一存を配置した。和泉守護細川氏は在京して、守護代の松浦氏が勢力を拡大し、敵対した岸和田氏を従属させて松浦萬満に和泉支配を三好長慶が命じるとともに、その養父の松浦盛と十河一存を後見役とした。十河一存は讃岐十河城の十河氏を継ぎ、三好軍団の猛将の存在となると同時に京都周辺や摂津欠郡、堺



久米田合戦場から久米田寺を臨む



久米田合戦での三好実休戦没地石碑

近郊に多くの権益を有したために松浦萬満の後見とし、和泉を三好長慶が独自の裁許で支配する。それに対して泉南に勢力を拡大させていた根来寺勢が対立し、和泉支配を任された一存は対立姿勢を強めて泉南を含めた和泉一國支配を目指した。岸和田城が和泉一國の政庁となる。十河一存が永禄四（一五六一）年四月に死去し、長慶は一存の嫡男の孫六郎（後の三好義継）と萬満の後見となり、十河・松浦氏による和泉支配を維持しようとした。しかし、畠山氏や根来寺との軍事的緊張が高まり、幼主では統率できず、新たに松浦氏の後見として河内高屋城に在城していた三好実休になる。この年の後半から岸和田城外の久米田寺周辺で紀伊からの畠山高政と根来寺勢と三好実休勢が対峙し、翌年の三月五日に両軍が激突し、先鋒の篠原長房勢が

紀伊勢を突き崩し、次陣の三好康長勢が突進して湯川勢を混乱させたが、そのために三好実休の本隊が孤立して前進して前を詰めたところに、根来鉄砲衆が廻り込み、その鉄砲に撃たれて三好実休が壮烈な戦死をして三好軍が総崩れとなり、後に阿波では困難に遭遇することを「久米田の退き口」と伝承し、阿讃淡に退陣した主な武将は全て剃髪して坊主頭となって入道名を名乗った。紀伊勢が三好長慶の飯盛山城を囲んだが、芥川山城からの三好義興勢と京からの松永秀久勢が調略しながら逆襲して教興寺合戦で雪辱して紀伊勢を退却させ、高屋城を奪回し、岸和田には長慶の三弟の安宅冬康を配置して和泉支配の小康を得るが、衆望が集まった冬康を長慶が永禄七（一五六四）年五月に飯盛城に招き主従共に誅殺し、そのことに煩悶しながら長



紀伊北部の畠山氏の山城跡を眺む



有田川町の山上から河内・和泉の間の山脈を眺む

慶が七月四日に病死して三好氏が急速に衰亡する。このように、和泉を支配下に入れて領域拡大して岸和田城を和泉の政庁としたが、松浦氏の後見として和泉支配に関わった十河一存・三好実休・安宅冬康が次ぎ次ぎに死去し、さらに大黒柱の長慶が病死し、その前年に唯一人の後継の三好義興も病死していて三好氏が没落する。

紀伊の国の有り様

岸和田が特異な支配構造を持つ紀州勢の和泉進出を抑える拠点となった。河内・和泉守護であった畠山氏が三好勢に追われた失地回復のために根来衆と共に和泉・河内に進出する。それで打撃を受けた三好氏が衰亡する。

戦国期の紀州の権力地図は伊都郡は高野山、那賀郡は粉河寺と根来寺、名草郡・海部郡は雑

賀衆、有田郡は守護畠山氏、日高郡は幕府の奉公衆の湯河氏と玉置氏、牟婁郡は奉公

衆の山本氏と熊野三山の熊野勢が勢力圏を持って、九つの勢力圏に分立していた。それによって紀伊には一國を支配下に置くような戦国大名は成立しなかった。紀伊は高野山・粉河・根来・熊野などの巨大な寺社勢力が隆盛する国であった。この寺社勢力を支配下に置くために三好長慶・織田信長・豊臣秀吉が苦心する。長慶が三兄弟を死没させ、その後に三好三人衆と松永久秀の抗争を経て信長が京畿・堺を支配して和泉を支配下に置かんとした時に紀伊の雑賀衆が石山本願寺を中心とする信長包囲網が形成され、それに雑賀鉄砲衆が加わり、六天魔王の信長を震え上がらせる。十年の歳月の後に石山合戦を終結させて次なるステップの時に明智光秀の謀反による本能寺の変が発生。信長の後を継いだ秀吉が、徳川家康と小牧・長久手に対峙した時に、家康と結んだ雑賀・紀伊勢が秀吉の背後を突かんとしたために、その抑えに中村一氏を岸和田三万石に秀吉が封ずる。三好氏の滅亡から織田・豊臣氏の勃興の時に岸和田が紀伊勢を抑える拠点とされ、岸和田城主となった中村一氏に叔父・甥の關係の三好康長と行動を共にした横田村詮が中村一氏と出合い、その重臣となる。